Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P－57 pT1b期子宮頸癌再発症例の検討

国立埼玉病院
吉井毅、小野寺成実、鄭智誠、福地剛、三上幹男

［目的］子宮癌集団検診の普及により早期発見、早期治療が行われ、その成果が上がってきている一方で、Ⅰb期癌の5年生存率は77.4％（婦人科腫瘍委員会第35回治療年報）と満足すべき結果は得られていないのが現状である。そこで当科で経験したpT1b期癌再発例を検討し治療方針の決定に際しての留意点を分析した。［方法］1982年1月から1997年12月までの16年間に当科で診断治療を行った頸癌患者461例の中で術後病理診断にてpT1b期とされた81例を対象として、臨床的背景及び病理学的背景と再発の関係を統計学的に分析した。［結果］①pT1b期癌の中で手術のみの症例では5.3％(1/19)に再発が見られ、再発例は再切り出しによる病理学的検討で小細胞癌と判明した。また手術＋追加治療例では32.4％(12/37)に再発が見られた。②骨盤ﾘﾝﾊﾟ節転移の有無及び筋層浸潤の深さと再発の関係を見ると、転移陰性かつ筋層浸潤<2/3の例で6.7％(2/30)、転移陰性かつ筋層浸潤≧2/3の例で15.4％(2/13)、転移陽性かつ筋層浸潤<2/3の例で0％(0/2)、転移陽性かつ筋層浸潤≧2/3の例で69.2％(9/13)に再発が見られた。③骨盤ﾘﾝﾊﾟ節転移陰性かつ筋層浸潤<2/3の例の中で再発2例は、27、31才と共に若年発症例であった。そこで骨盤ﾘﾝﾊﾟ節転移陰性例を年令により35歳未満、35～50歳未満、50歳以上の3群に分け再発率を検討したところ、それぞれ33.3％、0.0％、9.5％であった。また筋層浸潤<2/3の例ではそれぞれ50.0％、0.0％、0.0％であった。［結論］pT1b期癌の中で骨盤ﾘﾝﾊﾟ節転移陰性かつ筋層浸潤<2/3などの再発低危険群に関しても、詳細な術後病理診断を行い年令を考慮に入れ、術後の治療方針を決定すべきである。

P－58 子宮頸部扁平上皮癌に対するCDDP, Peplomycin, 5Fu（PPF）全身投与によるネオアジュバント療法（NAC）の臨床的研究

国立病院四国がんセンター
野河孝充, 川上洋介, 別府理子, 横山　隆, 千葉　丈
日浦昌道

［目的］進行子宮頸部扁平上皮癌に対し, PPFでNACを施行し, 有用性と問題点を検討した.　［方法］1994～98年の子宮頸癌40例(Ib-1, Ⅱa-4, Ⅱb-7, Ⅲb-25, Ⅳa-1, Ⅳb-2)にCDDP 75 mg/m^2 + 5Fu 750～1000 mg/m^2 x 5 + Peplomycin 5 mg/body x 6の全身化療を4週毎に施行し, 画像診断, コルポ診, 生検より原発巣とリンパ節の奏効率, 手術例からdown stagingとリンパ節転移の頻度, 血清SCC値の推移, 再発様式, 有害事象について考察した.
［成績］年齢分布は28～73歳（平均57）, 化療回数は平均2.6回(1～5), 奏効率は子宮頸部で72%(CR 5例, PR 24例), NC 28%(11例)を示した. 手術は48%(19/40)に施行, 特にⅢb期は36%(9/25)に可能となり, down stagingはpT0(T3b) 3例, pTis(T2a) 1例, pT1b(T2a, T2b, T3b各々2例) 6例, pT2a(T2b) 1例, pT2b(T3b) 4例となり79%であった. リンパ節腫大は画像診で57%(13/23)が縮小もしくは消失した. NAC前に腫大を認めた摘出リンパ節では38%(5/13)が陰性であった. 手術群のリンパ節転移はⅡb期67%(4/6), Ⅲb期44%(4/9)であった. SCC値はNAC前に88%が陽性で, 89%が下降し, 66%が陰性となった. Grade 2～3の悪心, 嘔吐は48%, 白血球減少は55%, 血小板減少は8%で, Grade 4の1例に血小板輸血を要した. 肺炎は3例(7.5%)に出現したがステロイド投与で改善した. 1年以上経過した症例の再発はⅢb期29%(4/14), Ⅳb期100%(2/2)で, 手術群の2例は骨とSCC値上昇, 放治群4例は主に子宮と傍大動脈節等であった.［結論］本法は奏効率, down staging共に良好で有害事象も許容でき, 子宮頸癌の有効な化療レジメンであるが, リンパ節転移への対策が更に必要と考えられた.

NII-Electronic Library Service